子ども像に関する一考察
—《良い·悪い》をめぐって—

尾　上　明　子

はじめに

日本には、昔から「7歳までは神のうち」という言葉があった。7歳は数え年であるから、その前は丁度、乳幼児期に当たる。これは、子どもの死亡率が高く7歳まで生きるかどうかが不確定であった時代、生き残った子どもが大切にされたということも関係している。(子どもは早くから働くことは当たり前であったし、子殺しも行われていた。)また、いたずらとか無作法はとがめられず貧しい中にも比較的のびのびと育てられた。そして、その無邪気さやあどけない姿が神に似たものとして捉えていた。このように象徴として神のように子どもを見たり、中世の西欧社会がキリスト教の影響から子どもも罪ある存在であるから、罪を排除するため厳しいしつけをし、「良い子」に育てねばならないとした対極的な子どもの見方もある。そのような背景のなかでルソーは、「子ども」を発見し、フレーベルは、子どもの中に神性を見、人間の本質の中に神に似た働きがあるとした。

子どもを育てる営みは、時代や国、個人によって様々であるが、保育や教育という営みは、意図的であれ無意図的であれ、究極的にはおとなの価値観を子どもに与えることにほかならない。

この度私は、各時代の「子ども観」を概観し、そこから「子ども像」を探求するとともに、子どもを持つ親にアンケートにより、親の求める「子ども像」及び子どもを育てるときの判断基準である「良い・悪い」について記述してもらった。アンケートにより、親は、どのような「子ども像」を求め、またどのようなことを「良い・悪い」としているのかを考察し、これからの「子ども像」を模索していく手掛かりにしていきたいと思う。

1　子ども像の変遷

(1) 旧約聖書の教育と子ども観

旧約聖書の教育は、申命記に端的に記されている。モーセという預言者を通して、全イスラエルの民に告げられた言葉、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは、心を尽くし、魂を尽くし、力をつくして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子どもに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」というものである。ここから、分かるように、この大命令を子どもたちに伝え、教えることが親や共同体の責任であった。

旧約聖書の時代は、人間は神の形に似せて造られ、造られた者としての責任ある生き方が求められた。そして、子どもは祝福の象徴でもあった。

創世記1章には、いわゆる聖書の人間観の基盤となっているキーワードがある。それは、神の形(似像 Imago Dei) という言葉である。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」　(創世記1：26)

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」　(創世記1：27)

また、ヘブル民族の父祖となったアブラハムの物語は有名である。子どもの無かったアブラハムに対して、神は「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」「あなたの子孫はこのようになる」(創世記15：5) と約束し、高齢になっていた妻サラは子どもを身ごもり、子孫は繁栄する。

旧約聖書は、子どもを見るとき、それはあくまでも神の意志によって与えられると信じている。それは、次のような記述でもわかる。

あなたは、わたしの内臓を造り
母の胎内にわたしを組み立ててくださった。
わたしはあなたに感謝をささげる。

わたしは恐ろしい力によって驚くべきものに造り上げられている。
御業がどんなに驚くべきものかわたしの魂はよく知っている。
秘められたところでわたしは造られ
深い地の底で織りなされた。
あなたは、わたしの骨も隠されてはいない。
胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。
わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。
まだその一日も造られないうちから。
（詩篇 139：13～16）

人間の子どもの生死は、全て神の意志であり、それはまだ、一つの生命が一日も造られていない内からであるということ。胎児であった子どもが創造主によって覚えられているという子ども観が記されている。

また一方、旧約聖書は、人間が神によって造られたことを忘れ、自己を絶対化し、弱くもろい存在としての人間観も描いている。イスラエルの歴史を通して、そのような人間が救いを求めて生きてきたありのままの姿を描き、そのような状況にもかかわらず慈しまれる神が人間に対して期待を持ち、本来に立ち返ること求めたのである。

（2）ギリシャの教育と子ども観

ギリシャの教育で何と言っても特筆すべきは、『スパルタ式教育』で有名なスパルタの教育である。スパルタは、約40万の人口で国民は3つの階層に分かたれていた。スパルタ人・ペリオコイ人・ヘイロース人でスパルタ人がこの土地の征服者の子孫であり、他の階層より少数であった。二つの民族はスパルタの十数倍の数であったため、これを服従させるため、あらゆる苛酷な行為や残虐な行為を行い国を治めたのである。女性には、競争・相撲・円盤投げ・槍投げなどの訓練をさせ、強い子どもを容易に生めるよう促した。子どもは、国家の所有物であるから、出生とともに長老の検査を受け、健康であれば育てることが許され、虚弱な子どもや身体に障害がある子どもは捨てなければならなかったという。幼いときから、よく命令に従い、困苦に耐え、戦いに勝つための激しい訓練を受けさせた。年齢が進むとともに、その度合いは一層過酷なものとなっていった。

もう一つは、ソクラテス・プラトン・アリストテレスに代表される『ギリシャ哲学』の確立であった。これらの大人物たちは、哲学を用い、思考し、真理をひたすら追究し、理想国家を建設しようとした。ソクラテスは師弟であるプラトンに大いなる教育的感化を与え、プラトンは、ソクラテスの死後、アカデミアの学園において、多くの青年を教えた。プラトンの「理想国家篇」によれば、正義の実現という理想を掲げ、人間性の美しい調和（美しい身体と心）と国家の調和的状態を目指した。その教育には、スパルタ的な要素が多分に残っていたが、子どもが生まれると養育の専門家に渡され、まず個性を観察することを重要視した。子どもの個性を見分けるには、自由な遊戯の間に行うのが最もよいとし、精神を養うのに音楽を用い、体を鍛えるのに体操をし、円満な人間の調和的発達を理想とした。音楽と体操を美しく調和させ、その調和を精神にもたらす人こそ、最も正しい意味において完全に調和している人であると言っている。だから、いかに音楽を巧みに演奏し得ても、それによってその人が、真に音楽を理解しているとは言えない。心身が調和している人こそ、音楽的な人であると言う。

（3）イエス・キリストの子ども観

イエスの子ども観は、新約聖書（4福音書）に記述されている逸話がその根拠となっている。それは、コメニウスをはじめ、ペスタロッチー・フレーベル・モンテッソーリなどその後の多くの教育者たちの「子ども観」に大きな影響を与えたイエスの子どもへの態度とまなざしである。

キリストの話を聞きに群集が集まってきたときのことである。弟子たちが、当時の社会の習慣によって女性や子どもを追い払おうとしたが、それを見たキリストが憤り、弟子たちを叱り、子どもを抱き上げ、

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」
（ルカによる福音書18：15～17・並行記事マタイによる福音書19：13～15、マルコ10：13～16）

と言い、祝福された出来事である。

また、五千人の人々へ食物を与えられた奇跡では、弟子たちが大勢の人々に食事を支給するようにイエスから命じられ困っているとき、一人の子どもの差し出した大麦のパン五つと魚二匹を祝福され奇跡を起こされたという記事である。ここでも、当時の子どもへの対応を考えると価値観の変革が示されている。

子どもが差し出した食料は、ささやかな量であり、またその行為も小さいことのように見える。こんなものが何の役に立つかと考えるのがおとなの一般的な見方であろう。しかし、イエスはこのような小さい者の行為を見逃さなかった。子どもの存在がそのままで認められ、尊ばれ、また、おとなは子どもの純粋な魂に学ばなければならないと言ったこのようなイエスの言動は、当時の通念をまったく覆すものであった。

（4）ローマの教育と子ども観

すべての道はローマに通ず！と言わしめ、千年以上の栄華を誇ったローマ帝国は、ギリシャと同じように都市国家、奴隷制度を基盤として、必要とする文化内容はギリシャから求めていた。

教育は、教育理想や教育が、生活の実際と密接して質実剛健で国粋主義的な家庭教育が中心になっていた時代（第１期）とギリシャ文化を取り入れ、学校中心の教育が成立していた時代（第２期）、更にギリシャ文化が一層浸透し、教育思想が折衷的で世界主義的性格を帯びる一方、教育が外面的な知識教育に偏重した時代（第３期）の大きな三つの時代に区分される。

第１期の著名な理論家は、カトー（BC234～149）第２期は、キケロ（BC106～43）第３期は、クインティリアース（AC35～96）であった。ここでは、第３期のクインティリアースの子どもについての記述を要約してみよう。

彼の人間観は、先駆者たちの考えの集約したものであって目新しいものはないが教育実践者として最も著名である。完成した人間とは、教養があり、道徳的に高潔なる弁舌家である。そのため、幼少より、母国語を正しく話すようにならなければならない。言語の教育は、まずギリシャ語から始める。読み方は、表情豊かで身振りも重要な要素とした。また、児童の精神的素質に注意し、ときどき遊戯をさせたり休養させ、精神を爽快に保つよう配慮しなければならない。また特に、キケロの教材は有効であるとした。その他、音楽・幾何学・算術・舞踊も教育の完成に重要であり、これらを徳をもって支配できる人間性を目指した。

（5）中世以降の子ども観

アメリカの教育史家モンローがくしくも言ったように、ルソー以前の子どもは、「おとなの縮図」であったり、「望遠鏡を逆さにしてのぞいたおとな」のようであった。また、子どもを原罪をもって生まれてきた者として、厳しい宗教的訓練と教育によって真の人間に立ち返えらせようとした。しかし、ルソーは、真っ向からこれに反対した。ルソーは、その著『エミール』において、次のような言葉で今までの子ども観を覆したと言ってもよい。

「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」
（第一編の冒頭）

また、次のように言っている。

「おとなは子どもというものを知らない。子どもについて間違った観念をもっているので、議論を進めれば進めるほど迷路に入りこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、おとなが知らなければならないことに熱中して、子どもには何が学べるかを考えない。」　（序章）

ルソーが「子どもの発見者」と言われるのは、子どもを子どもとして見なければならないと訴えたからである。子どもをよく観察し、何を求めているのか、すなわち、彼らに必要なことを教育によって与えていけば、必ず人間として生きる道が備えられるという。その道は自然に逆らわない道とし、人間の内部の発展もこれに逆らってはならない。すなわち、人間の成長は、一定の自然秩序に従っているから、教育は、この順序を無視して行ってはならない。おとなの生活の準備段階として、現在の子どもの生活を犠牲にしてはならないとしたのである。この考え方は、その後の教育家たちに大きな影響を与えることになる。

ルソーの信奉者であったペスタロッチーはもちろん、汎愛派と言われたバセドウやザルツマンなどはその代表である。

ザルツマンは、ドイツのシュネッペンタールに

ある有名な学校の創始者で、多くの家庭における子どもたちのあわれな様を見て、子どもたちに代わって世の親たちと教師に訴える書として、「まことに不合理な最近流行の児童教育法への手引き」という初版タイトルの本を出版した。それは、瞬く間にヨーロッパ全土に偽本が続出するほど流布した。たまたま彼が、本の扉絵に蟹の親子の絵を描き、その下にラテン語で、「おとうさん、まずおとうさんがしてみせてくださるなら、わたしもそうします」というイソップ物語の一説を書いておいたために、後に「蟹の本」として一世を風靡することになった。

「蟹の本・子どもを悪くする手引き」には、次のような目次がある。1 子どもにきらわれる方法として、子どもが「ひどいしうちだ」と思うことをやりなさい。子どもが父親や母親に反感を持つ様しむけなさい。子どもが甘えるときや喜ぶときにに冷淡にしなさい。子どもに子どもらしい遊びをゆるしてはいけません。子どもを絶えずからかってやりなさい。5 子どもの人間愛を枯らす方法として、子どもの前でしきりに人の悪口をいいなさい。

このように、一見して全く反面教師としての親や教育者の姿を30項目の具体的な事例で描き出している。この本を読んでいると、この時代の子どもたちがどのように扱われていたかが伺いしれる。

ペスタロッチーの教育方法は、当時、新教育の合言葉のようになっており、彼は主に「幼児教育の書簡」で母親の神への信仰と子どもへの聡明な愛が子どもを育てるとし、子どもは他の被造物と違い、心と頭と手を使い人生を生きていくのであるが、神は子どもに、神の声を聴く能力までも与えていると説いている。これほどまでに、子どもの尊厳性を謳ったペスタロッチーの思想はフレーベルに引き継がれた。フレーベルのその最も顕著な思想は、「子どもの庭」(Kindergarten) の思想であり、そこに現されている子ども観である。フレーベルは、子どもは神性を持ち、神に似たものとしての自由と創造性を受け継ぐものと考えた。その自由と創造性は、遊びの中で最もよく現され、子どもの遊びをよく観察し研究することに心を注いだ。彼が考案した教育遊具 (Gabe) は、日本では「恩物」と訳されたが、今日の世界のおもちゃの原点となっている。特に積み木は、子どもが作ったり壊したりできる自由性があり、彼の理念をよく現しているものである。また、子どもを庭で育つ植物にたとえ、どれ一つをとっても同じではないということ。それぞれ違う子どもがお互いの影響を受けて育ちあうこと。神と自然と人間の美しい調和ある人間像を目指した。そして、先に述べた子どもが子どもとして発達していく、その一つ一つの段階を生き抜くことの重要性を指摘した。「さあ！わたしたちの子どもらに生きようではないか！」と日記にしるしたフレーベルは、今日的な言葉である「子どもとともに」という姿勢を示し、おとな中心の教育の中にあって一つの目指すあり方を提示した。

(6) 現代の子ども観

まず、20世紀は、スウェーデンの思想家エレン・ケイ (Key, E. 1849～1926) の著作「児童の世紀」から始まったと言ってよい。ケイは、この書で、女性の解放と子どもの権利が保証されることを訴えた。しかし、子どもたちの不幸な状態はなかなか改善されず、戦争の世紀へと向かって行った。

1922年、第1次世界大戦によって多くの子どもたちが傷ついたことを憂い、イギリスの児童救済基金団体が「世界児童憲章」を出し、その理念を受けて、1924年国際連盟が「ジュネーブ宣言」を発表した。

第二次大戦後は、更に多くの子どもが悲惨な状況に置かれた。1948年国連総会において、「世界人権宣言」が採択され、戦争への深い反省のもと、自由平等、生命、自由、身体の安全、思想・良心・宗教の自由、社会保障、教育などの権利が宣言された。

日本では、これらの世界的な人権思想の流れを受けて、1951年「児童憲章」が制定された。

1959年の「児童の権利宣言」は、戦後の子どものあらゆる権利が保証され、10項目に渡ってまとめられている。さらに1989年国連総会において、「子どもの権利に関する条約」が採択された。

これらに共通し、確認されたことは、子どもはおとなの所有物ではなく、衣食住と共に教育や福祉が保証され、一人の人格を持った尊い存在とし

て認められなければならないことであった。

さて、わが国では、第2次大戦後、このような国際的な動きを大きく受け、日本国憲法が制定され、その基に1947年、「教育基本法」が出来た。日本国憲法で謳いあげた民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意がみられるものである。

第1条（教育の目的）には、次のように規定されている。

「教育は、人格の完成をめざし、平和な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」

さらに、乳幼児に近くなると、「学校教育法」第7章幼稚園　第77条　幼稚園の目的及び第78条目標が次のように制定されている。

第77条　幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

第78条　幼稚園は、前条の目的を実現するために、次の各号に掲げる目標達成につとめなければならない。

一 健康、安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。

二 園内において、集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと。

三 身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと。

四 言語の使い方を正しく導き、童話、絵本などに対する興味を養うこと。

五 音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現を養うこと。

「児童福祉法」第1条においても児童福祉の理念を次のように掲げている。

第1条　すべての国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。

②すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。

「児童福祉法」を受けた「保育所保育指針の目標」は次の通りである。

子どもは、豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うこと。

以上、国際的なレベルでの子ども観や国家的なもの、そして、それらを受けて作られた「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」などによって、一般的にはそれらが考慮に入れられた具体的「子ども像」が設定されているが今回は、ここまでに留めておきたい。

2 アンケート結果と考察

(1) アンケート方法

実施期日：2001年7月

対象：幼稚園保護者（東海地区6園500人）

回収数：95（19%）

質問内容（自由記述）：①お子さんは、どんな子どもに育ってもらいたいと思いますか。②お子さんを育てる上で、モデルとなるような人物や子育ての方法がありますか。③子育ての中で「良い・悪い」は、大きな問題であると思いますが、子どもさんにどのように伝えておられますかお教えください。また、「良い・悪い」がいつ頃、どういう過程で理解できるようになったか具体的な例で教えてください。（お父さんやお母さんがお子さんに「良い・悪い」を理解させることに成功したと思われる例も教えてください。）④何かメッセージがあればお書きください。

(2) ③の結果

保護者が自由に記述した文から、親にとっての子どもの「悪いこと」の内容を6つのカテゴリーに分類し、表1のように年齢別に並べた。初めから年齢別にとったアンケートではないことから、事例数に偏りがあることを初めに断っておきたい。6つの分類は、①安全に関わること②生活習慣に関わること③人とのかかわりに関すること④公共のマナーに関わること⑤言葉遣いに関わること⑥その他とした。

まず、1歳代は、安全に関わることでは、危険なことを「悪い」と捉え、高い所からの落下やは

表1　親にとっての子どもの「悪いこと」

	安全に関わること	生活習慣に関わること	人との関わりに関すること	公共のマナーに関すること	言葉づかいに関すること	その他
1歳代	高い所からの落下（2） 誤飲（1） はさみに触る（1） ストーブに近づく（1） はしを持ち歩く（1）	食べ物で遊ぶ（1）	人をたたく（3） 人にかみつく（2） 人のものをとる（1） 物を投げる（1） 親の髪をひっぱる・顔をひっかく（1）			猫のしっぽをひっぱる（1）
2歳代	何でも口に入れる（2） 道路への飛び出し（1） 熱いものに触ろうとする（1）	靴を家の中まで持ってくる（1） 食べ物をひっくり返す（1） 食べ物を粗末にする（1）	人を叩いたり、押し倒す（8） 人にかみつく（3） 物を投げる（3） 人の物を取ったり壊す（3）	病院やスーパーで騒ぐ（2） 外でのお弁当やお菓子のゴミの処理（2）	アカンベー、バカ、アホなどの言葉を使う（1） 感情のおもむくままに言葉を出す（1）	花や草をちぎる（1） 人の家の冷蔵庫を勝手に開ける（1）
3歳代	台所のもので遊ぶ（包丁を出していた）（1） 信号でふざける（1） 道路で遊ぶ（1） バスの中で立ち歩く（1） 横断歩道をのろのろ歩く（1） 駐車場でうろうろする（1） 道路の真中を歩く（1） 道路への飛び出し（1） プールで勝手な行動をとり、溺れそうになる（1）	おもちゃの片付けが出来ない（3） 食事を美しく食べられない（1） 排泄が自分でできない（1）	おもちゃの取り合いでけんか（たたく・とる）（14） ウルトラマンごっこなどのまねで人を叩いたり、押し倒したりする（1）	病院などで騒ぐ（4） 店から黙って商品を持ち出す（2） エレベーターや電車に乗るとき、降りる人を待ってから乗ること（1） ゴミをすてる（2） 道路の真中を歩く（1） 電車の中のマナー（1）	人のことを告げ口する（2） 悪いことをしたとき、謝らない（1） 「おはよう」「ありがとう」「ごちそうさま」などの挨拶ができない（1）	ティッシュや紙の無駄遣い（1） 欲しいものが手に入るまで泣く（1） 花を取ったり、虫を殺す（1） 何でも反抗する（1） イレズミがかっこよいと思っている（フィンガーペインティングをしたからか？）（1）
4・5歳代	道路への飛び出し（1）	片付けることができない（2） 歯磨きをしない（1） 食事のマナー（口に物が入っているとき話す。ひじをつく。途中で席を立つ。びんぼうゆすり。すぐに横になる）（1）	おもちゃの貸さない（2） 人を叩く（1） ドライブのとき、自分の好きなCDばかり聞く（1）	病院などで騒ぐ（1） スーパーのお菓子売り場で食べてしまった（1） お土産品を試食品と思って持ち出してしまった（1） おもちゃ（スーパーボール）を持ち帰ってしまった（1）	遊びの中で「死ぬ」という言葉を使う（1） 人を叩いたりして、謝らない（1） おもちゃを黙ってとる（1） 人に暴言をはく（1） 兄への言葉遣いが命令口調になった（1）	衣服の好き嫌いで泣く（1） 幼稚園へ私物を持って行き、人にあげる（1） ニュースから悪いことについて話す（1） クレヨンで家の中にらくがきする（1） 欲しいものが買って欲しい（1）
6歳代			友だちを仲間はずれにする（1） 兄弟で一つしかないものを分け合うことができない（1）			

さみやストーブに触れることから、おとなが守ることに配慮がみられる。親の対応として、危険な状況をつくらないようにすること。

手の甲などを叩き、少し怖い表情を見せる。止めたときは、笑顔でほめてやっているとだんだん分かってきたという回答があった。安全に関わることは、子どもが小さいときは、親や周りのおとなが配慮すべきことであり、このことが直接「悪い」ことには繋がらないと考えるが、何が危険なのかという感覚や知識を体得することは重要な問題である。生活習慣についても同様であろう。また、人とのかかわりでは、叩く・噛み付く・物を取る・投げるなどの行動を「悪い」とし、対応の多くは、言葉で教えること、もう一つは、同じことをやってみせ、痛いことを分からせるというのが多く見られた。

2歳代では、6つのカテゴリーの全てに事例が入り、安全に関わることでは、何でも口に入れる、道路への飛び出しなどがある。生活習慣に関ることでは、食べ物をひっくり返すことを「悪いこと」の内容としている。人との関わりは、叩く・押し倒す・噛み付く・投げる・人の物をとって壊すなどが17件と多いのが特徴である。親の対応としては、泣いている子を見て「かわいそうだね」「自分がやられたらいやだね」と説明したり、同じ痛いことをするなど1歳代とほぼ同じ対応であった。自我の芽生えや言葉の未発達、そして物への同一視からくるこだわりなど様々な要因から来るこれらの行動は、発達の見地から必ずしも「悪いこと」ではない。親から見れば、最も子育てで悩むところであり、子どもの表現や行動を結果的に「悪い」とみなしてしまうことは頷けるのあるが、このような問題を子育ての支援の中でもっと伝えられないかと考える。公共のマナーでは、病院やスーパーで騒ぐこと、外でのゴミ処理についての問題が入っている。また、2歳後半になると言葉がかなり自由に使える子どもが多くなることから、汚い言葉の使用に親は苦慮しているが、時々に強く注意したり、理由を言い説明している内に言わなくなったと記述している。その他の花や草をちぎるでは、「花や草が痛いと言ってるよ」と子どものアニミズムや同一視を利用した方法を使っている。

3歳代は、心身の成長に伴って事例件数が最も多く、内容も多岐に渡る。安全面では、道路に関する事例が多い。生活習慣では、おもちゃの片付けについてが3件。人との関わりでは、おもちゃの取り合いなどのけんかを「悪い」として14件あった。親が、このことを子育ての難しさを感じる最大の問題にしていることが伺い知れる。しかしながら、保育に拘わる者にとっては、「けんか」は、先に述べたこととかかわり、必ずしも問題ではなく、子どもの発達と深く関わる重要なポイントと捉えるところである。特に最近は、自我が十分に発揮できず、押さえられたまま「良い子」に育てられた子どもたちの問題が取りざたされていることからもこの問題は重要であると考える。

公共のマナーでは、2歳代の項目に加え、電車の中や乗り降りのマナーについてが上げられており、これらは日本人の欠ける点でありもっと大切に考えられなければならない。言葉の面では、「○○ちゃんがこんなことをしていたよ」と子どもが話すことを告げ口として捉えている場合があった。これは、状況が詳しくわからないので簡単に批判できないが、子どもの聞いて欲しいという欲求とどのように関わるのか考えてみる必要がある。しかしながら、あまり神経質にならないようにと考えたい。

4・5歳代では、安全面は極端に減り、生活習慣の中の食事・歯磨きが内容として上がっている。人との関わりでは、叩くなどの行動が減り、自分の意志で貸さないが2件あった。これは、親にとっては、友だちと仲良く、またスムーズに付き合って欲しいと思うところであろうが、なぜそのような行為をしたかと理由を聞くことが重要と思われる。言葉遣いでは、「死ぬ」という言葉を使う、叩いた後謝らない、暴言を吐くなどであった。「死ぬ」という言葉についての状況は、TVで簡単に人が死ぬ場面があった後遊びの中にすぐそれを取り入れていたということだが、親の対応は人が死ぬことは、居なくなって絶対会えないことなのだから、遊びで絶対使わないように説明したということであった。その後、誰かが使ったら良くないから止めようと自分から言うようになったとのことである。この場合、親の説明に対して子どもが素直に納得しているが、もし「死」をタブー

なものと考えているとしたら、せっかくの考える機会を逃してしまったことになる。

因みに「死」そのものがイコール「悪いこと」ではないということは確認しておかなければならない。人を叩くことについては、TVの「仮面ライダー」や「○○レンジャー」の戦うシーンを見て、自分から「お友だちにこういうことしたらいけないんでしょう？」と言ったとき、「そうだよ。これは全部お芝居いで、そうやっている真似だけで本当は、叩いたりけったりしてないんだよ。けがしちゃうし、痛くてかわいそうだもんね」「心の強い人は、相手をすぐ叩いたりしないのよ。がまんんできるからね」と言う言葉で対応した例があった。このような普段の子どもの発言により、共に考えることは、大変良い対応であると考える。その他では、洋服の好き嫌いで泣く、幼稚園に物を持っていき人にあげるなどがある。

6歳では、自分の子どもが集団で遊ぶようになって、意識はしていないようだが結果として仲間はずれをしているように捉えている親がいる。

（3）①の結果と考察

ここでは、アンケート①の質問、親の望む「子ども像」について、記述された文からなるべくニュアンスを崩さないよう要約・列記したいと思う。アンケート回答数は、95件。次に、以下の文面から、同じような言葉・内容のカテゴリーを集め、多い順に考察を試みたい。

1，まず生命の尊さを知り、自分も他人も平等であることに気づき、人へのいたわり・思いやりを持ち、愛していけるように。十分愛情をかければ、親からスムーズに自立できる。他人に恥じない生き方のできる人間。
2，自分の考えがあり、善悪が分かる人間。人の立場に立って物事が考えられる人。人・物・自然（全てのもの）に感謝できる人。いつも平等でいること。
3，芯の強い子。自分の意見や思ったことを口に出していえる子。
4，強くて優しい人。（本当に優しい人は、弱いものいじめはしない）教養のある人。（学校の勉強は、多少苦手でも社会常識と文化を学んでほしい）思いやりのある人。自立した人。
5，他人にやさしく思いやりのある子。命の大切さの分かる子。判断力・決断力のある人間。
6，外で元気に遊び、けんかしないでなかよく遊ぶ子。
7，思いやりのあるやさしい子。友だちの沢山いる子。自分の考えを持って努力できる子。（自立できる子）
8，健康で、自然の変化を感じ、美しいものに感動できる子。
9，親に頼らず、いろいろなものにチャレンジし、何事も最後までやりとげる子。
10，今のすさんだ空気の流れる世の中、力強く生きる力を培い、自分を大切にし、同時に周りの人も大切に自然にできる人。
11，けじめのある人。遊ぶ時はおもいきり遊び、学ぶ時は一夜漬けでもよいからとことんがんばる。万が一「不良」と呼ばれる道に入っても、成人したら、自立し、働いてくれればよい。
12，他人の痛みの分かる子。意見の言える子。勇気があって、感情豊かでユーモアのある人。
13，のびのび育って欲しい。他人に迷惑をかけることなく、自分の考えをしっかりもって欲しい。
14，子どもは、基本的に明るく元気。人に優しく思いやりの心がある子。
15，自分自身が幸せと思える生き方を見つけ、それに向かって進んでいける人間。
16，何か一つで良いので、自己の自信になるものを見つけ、伸ばしてあげたい。
17，思いやりのある子。自分に自信のある子。明るく、前向き（プラス志向）な子。好奇心旺盛で、いつも新しい発見や驚きに喜びを感じられる子。
18，自分の力（一人）で生きていける人。子どもが何か言ったら喜んで応援する。
本当にしたいことを見つけられるように応援したい。
19，人の気持ちが分かる人。人を許せ、愛し、優しくできる人。自分の考え、意見をもち自立している人。周りの空気が読める人。問題や困難に対して解決する能力が身についている人。
20，伸びやかに、そして精神的に強い子に。

21, 子どもの時にしか出来ないことをいっぱい経験して、人間（子ども）らしくなんでも感動できること。人や動物、植物を愛すること。周りに惑わされずに自分らしく生きられること。夢の世界を持てること。
22, 人に対する思いやりと優しい心をもち、穏やかに育って欲しい。誰からも好かれるような、明るく優しい子。
23, 自分の行動に責任を持ち、心の優しさをもつ意志の強い子。
24, 何事においても、前向きに考え、一つでも好きなことを見つけて欲しい。
25, 自分の意志をしっかり持ち、道徳と常識をわきまえた素直な人間。
26, 思いやりがあり、自分に自信が持てる子。自由な発想ができる。自分の意見をもち、心の広い子。
27, 強くたくましく。
28, 他人の痛みがわかり、自分の意見をきちんともち、必要に応じて表現できる子。他者に迷惑をかけないこと。
29, 基本的なマナーはもちろん、素直な気持ちを忘れないように。目標は小さくても、いつも努力する人間。前向きに生きていくことが大切。
30, 自分で物事を考え行動ができる自律した人間。相手の気持ちを理解し、思いやりのある優しい子。
31, 誰にでも大きな声で挨拶ができる子。「ありがとう」「ごめんなさい」が言える子。うそをつかない。自分の心に正直である。困っている人がいたら助けられる。自分の意見がきちんと言える。優しい子。
32, 優しく思いやりのある子。
33, 困っている人を見かけたとき、迷うことなく素直に手を差し伸べることができるような思いやり・優しさのある子。他人の痛みの分かる子。
34, 成長していく上で、良い事・悪い事の判断が自分で出来るように。自分らしさを知り、生活の中で生かすことが出来れば最高。
35, ウソをつかない。YES・NOがはっきり言える。
36, 素直でまっすぐな子どもに。
37, 自分のやりたいこと（仕事でも趣味でもいい）を見つけ、それに向かって努力できるような前向きな人間。人の痛みが分かる優しい人間。
38, 自分のことは自分で考え行動できる人間。
39, 周りの人たちの気持ちを考えて、思いやりのある行動の出来る人。自分の考えをちゃんと持てる人。自分の好きなもの・興味・関心のあるものを持てる人。
40, リストラ・就職難の世の中、自分のことを主張できる子。体が弱いので風邪をひかない元気で丈夫な子になってもらうのが一番。
41, 健康な子。人の痛みの分かる子。明るくよく笑う子。
42, 人を差別しない。（いろいろな考えの人がいて、いろいろな生活の人がいて、いろいろな性格の人がいる。いろいろな人がいていいと思える人）
43, 他人の気持ちの理解できる心の広い人間。
44, 人から好かれる人間。人が困っている時に、助けることが出来る人。
45, 人に対して思いやりのある「良い・悪い」が言える子ども。人に対して、迷惑をかけない子。
46, 誰からも好かれる心の優しい子。笑顔を絶やさず、その場がパッと明るくなるような印象をもつ子。
47, 人や動物をいじめたり、殺したりしない。思いやりやいたわりのある人。両親・兄弟姉妹・友だちを大切にできる人。
48, 思いやりのある子。元気な子。優しい子。
49, 自分に強い人間。人生の中で「何が大切なことか」を一生かけてでもいいから、気づいてほしい。（私の場合は、何気ない毎日の生活と家族）
50, 人の痛みが分かる子。困っている子がいたら声をかけてあげられる子。自分が嫌だと感じることはやらないこと。
51, 神を愛し、隣人を愛する人。そして愛される人。強くて（悪いことにNOとはっきり言える）優しい子。
52, 強い人間。明るく思いやりのある性格。

53, 世の中の役立つ人。（偉いとか地位ではなく必要とされること）
54, 素直で人に対して思いやりのある子。人に流されず、自分の考えを持っているが協調性を忘れない。
55, 善悪が分かり、正直な人間。弱者を守る力を備え、自分の意見をきちんと言え、何か一つでも得意分野を見つけてほしい。
56, 人のために働ける人（体力と学力が必要）
57, ひとりっ子なので協調性があり個性を生かしてもらいたい。そして、心の痛みが分かる子。
58, 思いやりがあり、正義感の強い人間。
59, 自分に厳しく、他人に優しく思いやることができる子。男の子なので明るくたくましく。
60, 明るい子。心も体も健康な子。
61, どんなことにも立ち向かっていく強い心と、周りのことを考えられる優しい心を持ち、大地にしっかり足をつけて生きてほしい。
62, 自分で考えて行動できる子。行動する前にちょっと立ち止まって（時間的に）考えられる子。
63, 心も体も健康で、きちんと生活できる。度胸があり、意見が言える。思いやりがある。何か一つに秀でている。
64, 男の子なので、ある程度強く（しっかりした考え信念など）持ち、悪いことをしてもそのことに対して罪悪感をもってほしい。何か好きなことを見つけ、自分に対して自信を持ってほしい。
65, 心身共に健康。
66, 愛する人を幸せにできる人。
67, のびのびと育ち、人を思いやり、人と人との関わりの中で楽しく生きることができる人に育ってほしい。
68, 心身共に健康で、自己の欲だけでなく平和や自然に対する愛情を持ってほしい。
69, 打たれ強い人間。何かあって泣いても悩んでも他の道を見つけていってほしい。
70, 他人を傷つけない子。いじめられても乗り越えられる強い子。笑顔や挨拶が自然にできる子。友だちの多い子。他人を差別しない子。
71, 明るく素直で誰からも好かれる人。常識のある人間。
72, 人は生かされているということが理解でき、どんな状況でも感謝できる。
73, のびのびと自分の意志で活動できる子。
74, 他人の気持ちがよくわかり、自分にとって嫌なこと、痛いこと、困ることをしない優しい人間。
75, 広い心を持ち、弱者に優しい人。失敗した時、挫折した時、立ち直る力を持ち、結果よりプロセスを楽しめる人。ボランティア・音楽・絵画、これらを通じて感動し、豊かな心の人になってほしい。（心の豊かさは促成栽培できない）
76, 子どもはいつも笑い、のびのびと自分のしたいことをし、元気よく誰とでも遊び、すくすくと成長してほしい。
77, 人の「痛み」の理解できる子。どんな小さいことでもよいから「自分に自信」を持って生きてほしい。
78, 思いやりのある子。
79, 人の話を落ち着いて聞ける人間。相手の立場になれる人間。自分の苦しみ・悩みを素直に打ちあけられる人間。自分の誤りを素直に認めることのできる人間。
80, 優しい子。当たり前の日常の挨拶、人を思いやる心を持ち、子どもらしい子どもであってほしい。
81, 素直でやさしい子。
82, 広い心を持ち、大きな志を持つ人。弱者いじめをしない真の意味の強い人。
83, 他人の痛みをわかってあげられる人間。
84, 人に優しく、善悪の判断のきちんと出来ること。他人にも自分にもうそをつかないこと。自分の間違いをきちんと認めて、謝れる素直な心を持つこと。この上に、友だちのたくさんいる人に育ってほしい。
85, 子どもが自分らしさを見つけ、それを大事にし、社会においてその役割を果せる人になってほしい。
86, 自然に親しみ、自然を愛する子ども。失敗を繰り返しながらも、そこから何かを学び取り、次に生かしていこうとする姿勢。勉強より道徳心のある自分をしっかり築きあげていける経験を積んでいってほしい。

87, 信念を持った生き方。
88, 思いやりのある人の傷みがわかる人。
89, 周囲の人と仲良く暮らすことができる人。
90, 人に好かれるやさしく思いやりのある人間。マナー（常識）を守る人間。
91, 自分で感じて自分で考え行動し、その責任を自分でとれるような人間。そんな人は、自然に思いやりや優しさのある人間になると思う。
92, 読書が好きで自分らしい個性を持ち、人のため役に立とうと思う心を持ってほしい。人の気持ちがわかり、思いやれる心。
93, 幸せで思慮深い人間になってほしい。自分の信念を持ち、他の人間にも優しくできる人間。
94, 優しい子。人のいたみ・悲しみが分かる子。
95、周りの人たちの気持ちを考え、思いやりのある行動のとれる人。自分の考えをちゃんともてる人。自分の好きなもの・興味・関心のあるものを持てる人。

最も多いのは、思いやり・優しさ・人のいたみが分かる、人の気持ちが理解できるという言葉で現わしている「子ども像」で52件であった。その中には、「思いやり・優しさ」の説明のない表現もあるが、相手の気持ちを理解する、困っている人がいたら助けるなどの具体的な説明がなされているのも多い。4の「強くて優しい人」は、本当に優しい人は、弱者いじめをしない。82の真の強い人は、弱者いじめをしないなど真の優しさや強さに言及したものが目を引く。これらの優しさは、相手の立場に立つことができることであるから自律と深く関係している。すなわち、親との初めの関係とそこから出てくる自律は、最も子育ての中心的課題であるからである。それは、子どもがまず受容されて育てられなければ、人を受容していくことが難しいということであり、親は子どもに優しさや思いやりを望むとき、このことを自覚しておかなければならない。私たちは、「優しい子」という漠然とした言葉を安易に使用し、理解したつもりになっているのが多いのではないだろうか。「優しさ」こそ、人によってその尺度が違うような気がする。真の優しさや強さは、どういうことかという中身を追求していかなければならないと思う。

次に多い表現は、自分の意見・考え・信念を持つ。YES・NOが言える。自分の行動に責任を持つ。「良い・悪い」の判断ができるなど自律的な人間像により近い内容で40件あった。これらの内容をみると、幼児を持つ親が、ともすれば「みんな同じ」ということを要求されがちな日本社会において、自分の意見を持つこと、それを人の前で言えることを望んでいることがわかる。19、は自立していることの上に問題や困難に対して解決する能力を望み、25、30、31、特に91は、フレーベルの「自己活動の原理」を思わせるような文である。

このような文面を見るにつけ、実はおとな社会こそ、「馴れ合い」と言われる体質を持つ日本社会において自ら諌めていかなければならない問題であり、最も重要な課題であると考える。おとなが子どもに望むのは、穿った見方をすれば、この難しいこと、出来ないことを子どもに要求しようとしているのかもしれない。

次は、明るい・元気・素直・のびのび・よく笑う・心身が健康・すくすくという表現に現される「子ども像」である。(26) この「子ども像」は、親はもちろん、保育に携わる者にとっても好ましい「子ども像」として使われる表現ではないだろうか。しかしながら、今回のアンケートでは、以外に少なかったということが言える。これまでの「子ども像」では、明るく元気な子ども、のびのび・すくすくは、「良い子ども像」の典型であった。このような子ども像は、それ自体悪いものではないが、いわゆるおとなにとっての都合の良い、押し付けの「子ども像」であってはならない。筆者の先行研究（注1）では、全ての子どもにとって、子供時代は決して楽しいものではないことが多くの事例で証明された。それでは、子どもにとって「苦しいこと・悲しいこと」が無意味だったかというとそうではない。しかしながら、子どもに、いつも元気で明るくを望むことは、おとなの身勝手である。年長児になり様々な面での能力差に気づきはじめると、子どもによっては、コンプレックスの芽生えがあり悩むことがあるということを覚えておかなければならない。また、心の葛藤

も体験する。子どもが、ありのままを受容されていると感じ取り、結果として元気で明るいのであるならば望ましいが、「良い子」を演じてしまう子どもがいることを親や保育者が知っていなければならないであろう。

次に少数（12）ではあるが、生命や自然に関わる表現がある。2の人・物・自然（全てのもの）に感謝できる人。8の自然の変化を感じ、美しいものに感動できる子。17いつも新しい発見や驚きに喜びを感じられる子。86自然に親しみ、自然を愛する子どもなど、文面から生命の重要性を感じ取れる表現となっている。

その他、自分に自信をもって生きることが出来る子。自分自身が幸せと思える生き方を見つけ、それに向かって進んでいける人間。結果よりプロセスを楽しめる人。豊かな心の人。自分らしさを知るなどに注目したい。

また、世の中のために役に立つ人は、大変少ないのが現状である。気になる表現としては、誰からも好かれるというのがある。子どもへの期待を窺い知れる表現である。

3　おわりにかえて
～「子ども像」と「良い子」の問題～

子どもを育てる営みは、その時代を背景として、どのような時代であったかを象徴するものとして見ること出来る。子どもは受身の存在として生まれてくる以上、おとなの価値観を否が応でも感じ取り、学び、模倣し生きていく存在であるということをはじめに述べた。それは、おとな側にとっては、実は大変深刻で重要な問題であるのであるがそのことに気付いているおとなはそう多くはいない。そして、おとなは多くの場合、おとなの都合によって子育てをし、なるべくおとなにとっての「良い子」を作ろうとする。

4歳の女児が自分が大きくなって赤ちゃんを産むときについて母親に話している言葉を聞いてみよう。

「ちいちゃんは、ちいちゃんみたいに、お父さんに肩車してと言ったり、うるさくしたり、そんなことぜんぜんしなくて、お風呂から上がったらすぐにパジャマ着て、はをみがいてネンネスル、そんないい女の子を一人だけ産む。お母さんたちもそんな子ほしいやろ？」

ここから、子どものメッセージが聞こえてくるような気がする。「私は、おとなの好きな良い子がどんな子か知っているよ。でも私は、いつもそんなにいい子でいられないの。わかってね」ということではないだろうか。

また、「クマのプーさん」の作者、A・A・ミルンは、次ぎのような詩を書いている。

「いい子」
おかしいわ　ママとパパがよくきくのは「ジェーン？いい子でいたの？いい子でいたの？」
おかしいわ　こういってまたくりかえすのは「いい子でいたの？」「いい子でいたの？」
あたしはパーティーにいく　お茶によばれていく
海べのおばさんのうちへ一週間もいく
どこからかえってもいつもおなじ
「ねえ　いい子でいたの　ジェーン？」
たのしい日のおわりはいつもおなじ
「いい子でいたの？」「いい子でいたの？」
どうぶつえんにいった　ママとパパはまちかまえていていう
「いい子でいたの？」「いい子でいたの？」
あたしがなにをしにいったとおもっているのかしら？
どうぶつえんでわたしがわるい子になりたいとおもうかしら？
そうだとしてもあたしがそれを話すかしら？
あたしがわるい子でなかったとしんぱいして
「ねえ　いい子でいたの　ジェーン？」

また、「いいこってどんなこ？」という絵本がある。

「ねえ、おかあさん、いいこって　どんなこ？」
うさぎのバニーぼうやが　たずねました。
「ぜったい　なかないのが　いいこなの？ぼく、なかないように　したほうが　いい？」
おかあさんは　こたえました。
「ないたって　いいのよ。でもね、バニーが　ないていると、なんだか
おかあさんまで　かなしくなるわ」
「じゃあ、　いいこって　つよいこのこと？なんにもこわがらない　つよいこに　なってほしい？」
「まあ、バニーったら。こわいものが　ないひとなんて　いるかしら」
「おこりんぼは　いいこじゃ　ないよね。ぷんぷんおこっている

ぼくなんか、おかあさん　きらいでしょ？」
「とんでもない。　ぷんぷん　おこっているときも
　にこにこ　わらっているときも　おかあさんは
　バニーが　だいすきよ」

(――は筆者)

バニーの質問は、まだまだ続く。このようなことを子どもから聞かれる経験をする親は多いと聞く。子どもは親の愛をいつも確認したいのである。そしてミルンの詩のように、私を信頼して欲しいという内容も含まれている。子どもは、「良い子」であることは、親の喜ぶことであると捉えている。

2000年5月に愛知県豊川市で起きた高3男子の主婦刺殺事件に対して、新聞に多くの市民からの反響が載せられたが、20代の主婦から「少年をまるで自分の分身のように感じた」「彼は、良い子の仮面かぶっていた」という意見が寄せられていた。彼女は、3歳で両親に捨てられ祖父母に育てられたが、自分の意見を持たず言われるがままのコースをたどり、「何も悩みがなくていいね」と言われる明るい子だったという。しかし、うつ病になり自殺願望に苛まれていた矢先に事件が起きたと言う。祖父母からは、いつも「おまえさえ意見を言わなければいい」「みんな親のために生きているんだ」と言って育てられた。

ある教員は、20年の中学校の経験から、その主婦の意見に対して「いい子を演じ苦痛だった」ということに同感して、職場で「あの子はいい子」という言葉をよく聞くが、自分は「いい子」という言葉を使わないようにしている。保護者や教員に「いい子」と「心優しく素直な子」とどちらがいいかと聞くと、ほぼ100%が後者と答えるが、現実は違って、殆どが「いい子」を育てようと躍起になっている。世間一般に「いい子」とは、①学習意欲があり、成績がよい。②教師や親の言うことをよく聞く。③納得できないルールでもよく守れるというおとなに都合よく作られた子どもへの価値観だ。よく事件が起きると「ごく普通のいい子だった」と報じられることが多いが、全くナンセンス。茶髪にピアスの、いわゆるツッパリの子は、殆ど①から③に当てはまらない。その多くは、仲間を大切にし、虫も殺さない「心優しく素直な子」だ。素直だから、納得のいかないことに反発し、仲間や友人を大切にするあまり、いろいろこまごました問題を起こす。問題は、「いい子」を演じる子の内面をどれだけおとなが、理解しているかということだ。思春期に悩まない子なんていない。作られた「いい子」が問題であって、そこに教師も親も目を向けて、内面を理解することを怠らないようにしたいと言う。(2000年5月8日・10日付け中日新聞)

さて、私たちはとかく人や物事を見るとき「良い」と「悪い」の二極的な見方をしてきたのではないだろうか。河合隼雄は、「子どもと悪」の中で、現代日本の親たちは、教育に熱心なのはいいが、なんとかして良い子をつくろうとし、そのために悪の排除をすればよいと単純に考える誤りを犯している人が多いと指摘している。氏は、「悪」を決して肯定しているのではないが、「悪」の悪たる点だけを見ようとせず、悪が想像性や創造性を生み出す原動力となっていることや人生に成功したと思われる人が、必ずしも「良い子」であったのではないことを多くの事例を挙げ述べており興味深い。更に、「悪」をスピノザが「関係の解体」として捉えたことを例に出し、「悪」のいろいろな様相を考えると「近代の科学技術を、人類の進歩として喜ぶ側に立てば、それは『善』につながるし、最近意識されてきたように自然破壊を憎む立場に立つと、それは『悪』につながってくる。これは、人間の本性のなかに、自然の流れに反するものがあるというところに、その根本があると思われる。人間が自然のままだったら今日の文明はなかったろうし、さりとて、その発展を『善』として手放しで喜んでおられないのが現代の状況ではないだろうかとこの問題の深さを語っている。

一人の人間を「良い・悪い」で考えること自体ナンセンスであると言ってしまえばそうなのであるが、それほど私たちは、普段の生活のなかで人間や物事の両面性を考えることが少ない。ましてや、子どもを見るとき私たちはこの間違いを犯しやすい。

キリスト教保育指針の目標に、次のような言葉がある。(6)「子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分のなかにあることに気づき、そのような思いに抵抗することができるようになる」

また、ツィンク夫妻は、宗教教育の目的を、子どもが自由で自立的な人間となり、他からの借り物や受け売りでない良心を発達させ、自己の良心を検証する尺度を見いだすこととし、いたずらに不安のとりことなったり、信頼の心を失ったりすることなく、自己の道に確信をいだく人間になることであると言う。

物事の両面性を見たり考えたりすること、また、自分の中の良心に確信を持つこと、更にその良心を検証する尺度を見いだすことは重要であり、そのような要素を「子ども像」のなかに積極的に入れていきたいと思う。人間は、自分の本来の姿、あるべき姿を自分で見つけることができたとき、真の幸福を手に入れることができるのではないだろうか。多くの先人たちがそれぞれの時代に子どもを発見したように、私たちも先人たちに学びつつ、子どもを発見しつづけなければならない。「子ども像」を完成されたものと考えず「子どもとはどのような存在なのか」を問い続け探求していかなければならないと考える。

注

1）「保育者養成に関する一考察」～子ども時代を語るということ～日本乳幼児学会第10回大会

引用文献

1）「聖書」(新共同訳) 日本聖書協会 2001年
2）ルソー　今野一雄訳 「エミール」 岩波文庫 1964年
3）ザルツマン　村井実訳「かにの本」あすなろ書房 1971年
4）A・A・ミルン「クマのプーさん全集―おはなしと詩―」石井桃子他訳 岩波書店 1997年
5）ジーン・モデシット文　ロビン・スポワート絵「いいこってどんなこ？」冨山房 1994年
6）河合隼雄 「子どもと悪」岩波書店 1997年
7）キリスト教保育連盟「改訂キリスト教保育指針」2000年
8）イェルク・ツィンク、ハイディ・ツィンク「幼児の心との対話」新教出版社 1974年

参考文献

1）荘司雅子「フレーベルの生涯と思想」玉川大学出版部 1975年
2）コメニュウス 鈴木秀雄訳 「大教授学」 明治図書 1962年
3）長田　新監修 「西洋教育史」 お茶の水書房 1974年
4）幼児保育研究会／代表森上史朗編「最新保育資料集」ミネルヴァ書房 2001年

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 23, 2001

A Consideration about the Image of Child
— On the Value of Good and Bad —

Akiko ONOE*

子どもを育てる営みのなかで、「子ども像」を持つことは重要である。時代とともに、多くの先人たちによって「子ども」が発見され、「子ども像」が追求されてきた。今回は、これらの先人たちの「子ども観」を概観し、これからの「子ども像」を模索するために、アンケートによって、東海地区の幼稚園の保護者から、「子ども像」に関する意見を聞き考察した。最も望まれる子ども像は、思いやり・優しさ・人のいたみが分かる人、次が自分の意見が言える人であった。第3番目は、明るい・元気・素直などであった。また、子育てのなかで、何が「良い・悪い」とするかという内容を聞いた。そこから、人や物事を二極的に見る見方、そこから出てくる「良い子」の問題を考えた。私たちは、「子ども像」を探求していく過程においても、現代における子どもを取り巻く様々な問題を考慮しつつ、普遍的なこと（先駆者たちに学ぶ）と時代とともに変えなければならないことを見据えて「子ども」を発見しつづけていくことが求められている。

キーワード：子ども観、子ども像、「良い・悪い」、「良い子」、子どもの発見

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*